

徒然なる日記～酒に酔うこと～

E-book推進協会

酒に酔うこと

酒を飲むのが好きだ。初めて飲んだのは小学1年のころ。新幹線に酔い「水が飲みたい」と親父に言ったら、だまされてウィスキーらしき酒を飲まされ、新幹線の通路に倒れこんだ。あのときは酒が怖かったが今は好きだ。

酒好きの家系で、親父も親父方祖父も酒豪。酒どころ新潟で生まれ育ったことも手伝っている。2人に共通すること。普段は寡黙だが酒を飲むと饒舌になる。祖父のことは実はよく知らない。自分が生まれる前に亡くなったから。伝聞では相当に強いと聞いた。親父に言わせれば「酒を飲むだけが楽しみな親父だった」

自分自身、認めたくないが、その共通点はしっかり遺伝した。寡黙でシャイ。酒を飲むと気が大きくなる。その嫌いを補ってあまるほど、酒は魅力的だ。酒の味を覚え始めたころは、そんな一時の快楽にはまった。失敗もたくさんした。まあ、人並みくらいなものだが。酔って転んでけがしたとか、忘れ物したとか。

でも段々そういう無理ができなくなってきた。2009年12月、酔いつぶれ友人に連れられ帰ってきた醜態を、妻が本気で怒り、というより本気で心配したから。結婚直前だった。「ああ、もうこんな心配させちゃいけないな」って自制が働いて、以来無理はしなくなった。大人の飲み方、ってやつか。でも少しそれもさみしいな、って最近思う。

大学の知人が昔、5年くらい前かな、「宗教で酒を飲まないイラン人は人生の半分を無駄にしている」って真顔で言ってた。けど、分かる気がする。酒、って不思議だ。気が大きくなるし、勘違いかもしれないけど、頭が冴えたり、ふとアイデアがうかんだりする。

なんでこんな話を書いてるか。酒を飲んだ後だから。酒の勢いで筆が進む。改め、キーボードをたたく指が進む。「酒に酔うこと」がタイトルの日記は今後も何度か登場するかもしれない。乱筆お許しを乞う。

2012年9月22日